

モモ「もちづき」の果実横径を指標とした収穫法

高橋和博

(山形県立園芸試験場)

The Harvesting Method of using Fruit diameter in 'Mochiduki' Peach

Kazuhiro TAKAHASHI

(Yamagata Prefecutural Horticultural Experiment Station)

1 はじめに

加工用モモ品種「もちづき」は、旧農林水産省果樹試験場で育成された品種で、無袋栽培でも果皮及び果肉が着色しないため、省力的な加工向け品種として有望である。しかし、「もちづき」は、果実が小玉になりやすく、加工向けとして商品性の高い果実の収量が少なくなる場合がみられる。そこで、加工向けの収穫期における果実肥大特性を明らかにし、加工向けの商品性の高い果実生産 (L級果及びM級果) の収穫法を検討した。

2 試験方法

(1) 供試品種 野生モモ台「もちづき」 5年生
主幹形仕立て

(2) 調査方法

1) 収穫時の1果重と果実横径の関係

2001年8月17日に120果を収穫し、1果重と果実横径(赤道面の最大径を横径とした)を測定した。なお、加工向けの階級区分は、山形県出荷規格に準じ、2L果(230g以上)、L果(190g以上230g未満)、M果(140g以上190g未満)、S果(120g以上140g未満)及び2S果(120g未満)とした。

2) 収穫期の果実肥大の推移

収穫始期の2001年8月14日に40果にラベリングし、その後、毎日午後4時に果実横径を測定した。

3) 収穫始期の果実の大きさが収穫時の果実品質に及ぼす影響

収穫始期の8月14日に樹上で果実横径によりL、M及びS級果に区分し、8月21日に収穫し、果実品質(1果重・果肉硬度・果皮色・糖度)を調査した。なお、果肉硬度は円錐形針頭のユニバーサル硬度計、果皮色は色彩色差計で測定した。

3 試験結果及び考察

(1) 収穫時の1果重と果実横径の関係

収穫時の1果重と果実横径には高い相関($R^2=0.974$)がみられ、1果重が140g以上190g未満のM級果の横径は66.1mm以上73.1mm未満で、190g以上230g未満のL級果の横径は73.1mm以上78.6mm未満であった(図1)。

これらのことから、商品性の高いL級果及びM級果を収穫するためには、果実横径を収穫基準に利用できると考えられた。

(2) 収穫期の果実肥大の推移

果実は収穫期間中も肥大を続け、1日当たり肥大量は、果実横径で0.6~1mm程度であった(図2)。

このことから、収穫時期を遅らせることにより、果実の肥大を促すことが可能と考えられた。

(3) 収穫始期における果実の大きさとその後の果実肥大及び収穫時の果実品質の関係

収穫始期における果実の大きさ別では、いずれの階級区分の果実とも、樹上で肥大を続け、収穫始期の7日後には1階級上の果実の大きさになった(図3)。

収穫始期から7日後に収穫した果実は、加工向けとして問題のない品質であった(第1表)。

これらのことから、「もちづき」は樹上での日持ちが良好であり、収穫時期を遅らせることにより、1階級上の大きさでの収穫が可能になると考えられた。

4 まとめ

「もちづき」の加工向けとして収穫するためには、果実横径を収穫基準に利用でき、L級果及びM級果に達した果実から「選りもぎ」することにより、残った果実の

肥大を促しL級果及びM級果の比率を高めることが可能と考えられた。なお、「もちづき」は樹上での日持ち性が

良好な品種であるが、収穫作業は、収穫前落果や果実軟化に留意して進める必要がある。

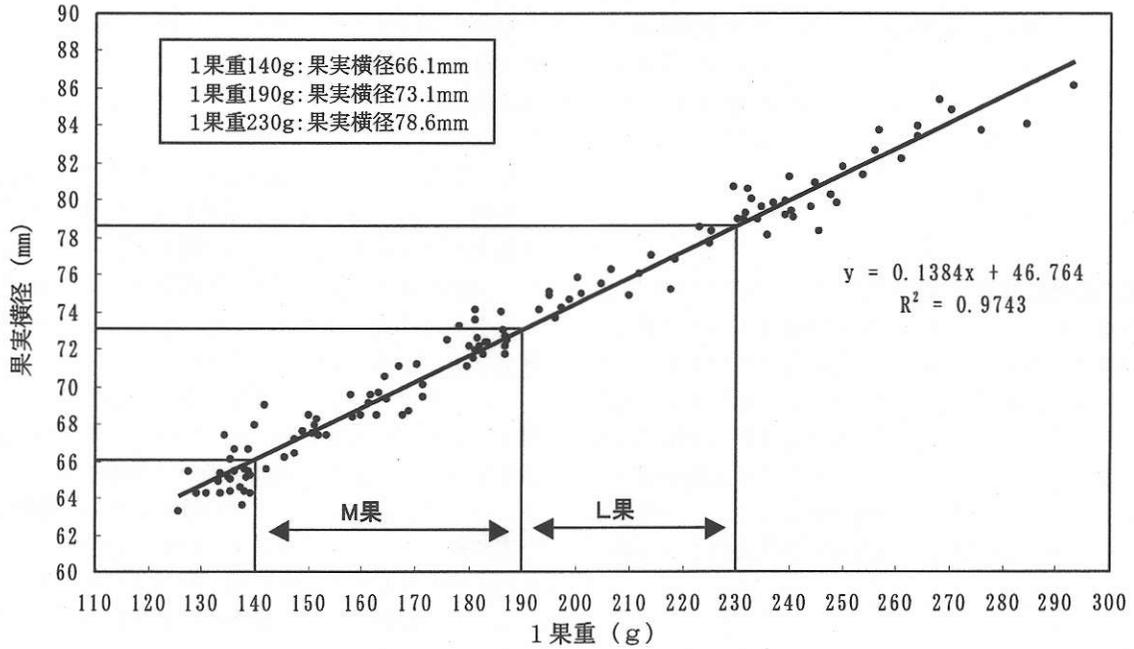


図1 収穫時の1果重と果実横径の関係 (n=120)

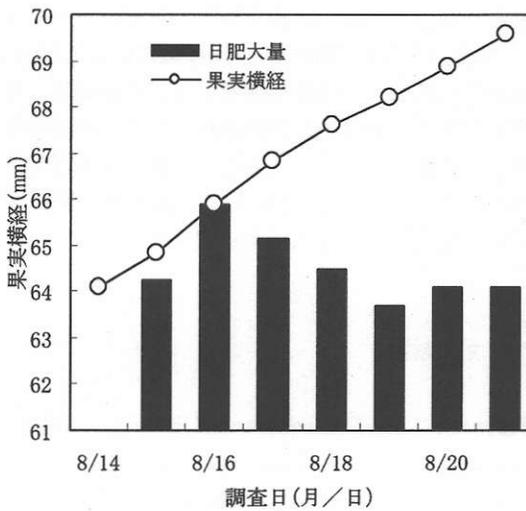


図2 収穫始期からの果実横径の推移と日肥大量

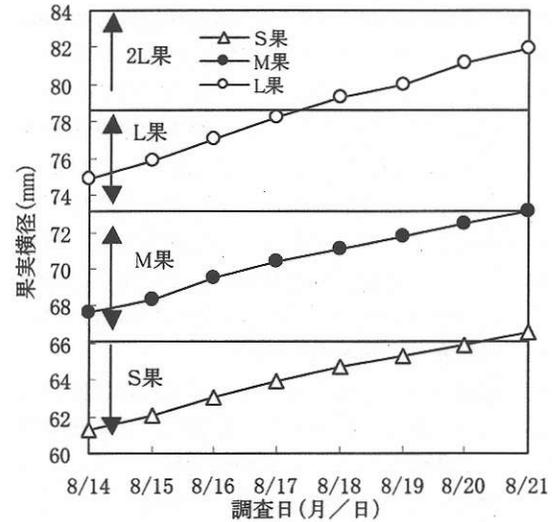


図3 収穫始期における果実の大きさ別の肥大推移

表1 収穫始期の果実の大きさが収穫時の果実品質に及ぼす影響

収穫始期の果実の大きさ		収穫時果実品質 ^x				
階級区分 ^z	果実横径 (mm) ^y	果実横径 (mm)	1果重 (g)	果肉硬度 (kg/cm ²)	糖度 (Brix)	果皮色 (b値)
S果	61.3	66.6	142	2.0	12.5	33.9
M果	67.7	73.2	183	1.8	12.4	34.1
L果	74.9	82.0	260	1.7	13.1	35.2

z: S(横径66.1mm未満)、M(66.1mm以上73.1mm未満)、L(73.1mm以上78.6mm未満)

y: 8月14日調査

x: 8月21日調査